

第5回 TPM と臓器提供エキスパートミーティング

兵庫県災害医療センター 看護師
高月 彩

当センターの臓器移植院内コーディネーターとなって1年半、兵庫 TPM の活動に参加するようになってもうすぐ1年が経とうとしています。今回、神戸大学病院 吉川先生から院外での私の活動を記事に書いて欲しいと声をかけていただいたので簡単ながら報告させていただきます。

まず、2016年9月にスペインから3名の講師を招き第5回 TPM モデルによる臓器移植ワークショップが開催され、私は受講生として参加しました。印象的だったのは、「首から上がない人間の循環を維持して生きていると言えるのか。脳死は同じことだ」という内容の言葉でした。医療者として、臓器移植に関わる者として、その言葉は理解できます。ですが、それが日本人に受け入れられるのか考えさせられました。理屈では分かっていますが、もともと心臓死=死と考えてきた日本人の国民性や宗教・価値観が諸外国との臓器提供者数の差につながっていることを認識しました。また、救急の現場において家族への選択肢提示があまりなされていないことも大きな壁になっているのだと感じました。



2016年12月には救急医療における脳死患者の対応セミナーで症例報告を行いました。2015年12月に当センターであった脳死下提供と院内コーディネーターの役割を併せて発表しました。症例をまとめるにあたり、ドナー家族との関わりやドナー管理について振り返る良い機会となりました。選択肢提示をする前に「臓器提供したい」と家族から申し出があった症例でした。頻りに面会に来る家族ではありませんでしたが移植を希望した時の思いや決められた最期の日を迎えるまでの心境、突然家族を失う辛さや悲しみなど気持ちは吐露できているのか。看護師として、院内コーディネーターとして、プライマリナースとして、もっと別のアプローチが出来たのではないかと振り返りながら考え

る機会となりました。ファミリーアプローチはバッドニュースや選択肢提示を伝える場面だけではない。当時、臓器提供について勉強して4ヶ月しか経っていなかった未熟な私には、配慮が出来ていなかったように感じます。

2017年3月には沖縄TPMモデル臓器提供アドバンスコースセミナーに講師として参加しポテンシャルドナーディティクションのグループワークを担当しました。いくつか症例を作成し、ポテンシャルドナーであるかどうかグループで考えてもらいました。ポテンシャルドナーについて、自分は分かっているのか。当センターでは医師のみでディティクションを行い、看護師は参加していません。私は、看護師もディティクションできないといけない、ポテンシャルドナーを認識しないと何も始まらないと思います。だからこそ、講師でありながら自分の勉強にもなり、とても有難い機会でした。そして、このセミナーでは心肺同時移植を受けたレシピエントの話の聴くことができました。普段関わることのないレシピエントの想いに胸が熱くなりました。ドナー側はレシピエントの想いを知らないといけないし、レシピエント側もドナーや家族の想いを受け止めなければいけない。双方の思いや大変さを理解し尊重してこそ、よりよい臓器提供の場となるのではないかと感じました。

まだまだ知識も技術も浅く課題も山積みですが、自分には何ができるのか考えながら、まずは院内スタッフの知識向上に向けて働きかけが出来ればと考えています。そして兵庫TPMでの活動を通してより多くの人に臓器提供について考えてもらえたらなと思います。